

文華苑の歴史

— 高木になったノウゼンカズラ —

文華苑のノウゼンカズラには、中国原産の種類9本と一昨年植え付けた北アメリカ原産の種類2本とがあります。中国原産の3本はアカマツに絡み付かせている為に、マツの樹高に達するまでに生長しています。

元々、ノウゼンカズラは蔓性の落葉低木で、他の樹木に絡み付かないと高木になることはありません。蔓性の植物(木本)は、十分な太陽光線が当たると、蔓性の性質が普通の性質へと変化します。ノウゼンカズラは、絡み付く樹木の樹冠まで達しますと、蔓の生長が止まり、枝を出して行く性質に変わります。従って、高い樹木に絡み付くのと低い樹木に絡み付くのとでは、随分樹高に差が出来ます。支柱で支えてやれば、樹高は自由に調整することが出来ます。

文華苑ではこの性質を利用して、高木のアカマツに絡み付かせ、10m以上の樹高に育てたものが3本あります。樹齢30年以上のものも2本あります。これ程までに大きくなったものは珍しく、近辺では見掛けることはありません。

中国産のノウゼンカズラの渡来は古く『本草和名』(918年)に記載があり、北アメリカ原産のノウゼンカズラの渡来は大正末と言われています。文華苑のものでも樹齢40年にすら達していないのでありますから、全国ではもっと大きなノウゼンカズラがあっても不思議ではありません。知らないだけでも分かりませんが、花の蜜が目に入ると目がつぶれると言われてい

たから、大きく育てられることが避けられてきたのではないのでしょうか。もともと、毒は無いようですが。

文華苑では、支柱仕立てより他の樹木に絡み付かす方が自然で、植え付けはこの方法を行っていました。ところが、マツノザイセンチュウによって、肝心の支えとなるマツが何本か枯れてしまったのです。大きくなったノウゼンカズラは、その木から外すことも出来ず、そのまま放置していました。何年も経ちますと枯れたマツは、脆くなり、最後には根元から折れてしまいました。

当然のこと、ノウゼンカズラも脆い木ですので、根元から折れてしまったのです。この様なことがあり、危険でもありますので、現在その根上のものを支柱仕立てにしています。

中国産のノウゼンカズラは、生命力旺盛な植物であります。幹が折れても根から芽を出し、枯れることはありません。また、花も6月下旬から7月の中旬まで咲き、咲き終われば、もう一度花芽が形成されて二度咲きます。ただし、この木の欠点は、日本では殆ど種子が出来ないことと、しっかりした花でも落ちてしまい、蕾のまま落ちることもあることです。北アメリカ原産の種類にはあまりこの様な落花はありません。橙色のラッパの様な花が通路に落ちていたら、その上にはきつとノウゼンカズラがあります。

黄色の種類と橙赤色の種類は北

アメリカ産で、花が少し小振りで、開花枝は長くなりますが、文華苑では現在まだ咲いていません。ノウゼンカズラは幹がある程度太く(3cm以上)ならないと花芽が形成されにくい性質があります。また、冬季、開花枝は幹の際まで枯れますが、翌年の開花には影響ありません。

近年、様々な花木が海外から輸入され、ノウゼンカズラ科の種類も入って来ています。その中で、オーストラリア原産の桃色の種類が出回っております。

文華苑にはこの種類の方が似合うかも分かりません。少し寒さに弱い様であります、試みとして今年1本植え付けてみました。残念ながら、期待出来ない様であります。

何気なく植え付けて立派な樹木になる木もあります。考えて植え付けても駄目になってしまう木もあります。確実に言えることは、手入れの方法で、良くも悪くもなるのであり、手入れする者の気持の継続が必要なのです。

20年以上も前には、あまりノウゼンカズラを見掛けることはなかったのですが、最近、新興住宅の

玄関先で良く見掛ける様になりました。そのことは、それだけこの花に関心が高まったと言うことになります。壁面に這わせたものやポール仕立てにされたものなどありますが、さすがに、高木の松に這わせてあるものは、文華苑だけではないでしょうか。

高木になったノウゼンカズラの開花枝が、アカマツの緑と共に風に揺れながら花開く光景は、松に花が咲いた様であります。赤松の生育に対しては、余り良い条件とは言えませんが、今後何十年何百年と松が枯れず、共に生育することを祈っています。

来館されたお客様が、通路に落ちたラッパ状の花を手にとられ、ふと頭上を見上げられた時、松の樹冠に橙色の花が咲き乱れている光景に感動されることが私たちの喜びであります。

将来、桃色の花のものやアメリカ原産のものも加わり花房が風に揺れ、雨に打たれながらも落ちない様に、この情景を眼にする日が来ることを願い、私たちは待ち続けています。

(保安員一同)

アカマツに這うノウゼンカズラ



ノウゼンカズラの花

